

価値判断の変容を可視化する社会科授業分析

－ OPPAとKHCoderを活用して －

学籍番号 219313

氏名 近藤克樹

主指導教員 糸井川孝之

副指導教員 岩田文昭

1. 問題の所在

筆者はこれまでの経験から、「予測困難な時代の中で必要となる資質・能力を育むために求められる社会科授業とは何だろうか」という問題意識を抱いていた。学習指導要領や令和の日本型教育の分析により、価値的認識・判断と合理的意思決定を学習原理とする、判断・批判型、合意形成型の授業が求められるものではないかと考えたが、「子どもの学びの変容をどのように評価すればよいのか」という課題は残ったままであった。本研究はこれらの問題意識を出発点としている。

2. OPPAとKHCoderを併用した授業分析

本研究の目的は、OPPAとKHCoderを併用した授業分析法を用いて、学習者の学びの変容を可視化することである。近年、KHCoderを教育分野において使用する研究は増加傾向にある。峯(2021)は、毎時間の学習における学習者の振り返りに注目し、学習者の自由記述について、KHCoderを用いたテキストマイニングをおこない、学習者の意識を分析することを通して、学習者の行動の変容をリアルタイムで可視化し、評価していく社会科授業の方法論を提示した。しかし、先行研究には以下の問題点がある。振り返りの方法そのものに注目していない点だ。峯(2021)の中で用いられているロイロノートは、効率的な振り返りの収集ができる点が特徴であるが、学習者の変容を見取るという点から考えれば、より適した評価方法があるのではないだろうか。

筆者が注目した評価方法はOPPAである。堀(2019)の中では、一般的な評価方法でも学習の過程や変容を見取ることはできるが、OPPAで用いられる、OPPシートの要素のうち「学習前・後の単元を貫く本質的な問い」、「学習履歴」は学習前・学習過程・学習後の状態および変容を明確にするものであるとされている。そして、OPPAのように学習の前提が明確になっていたほうが、その変容や成果も明確になるということが指摘されている。

基本学校実習における研究では、先行研究を参考に、単元「東日本大震災からの復興」を構成し、実践後に分析をおこなった。

3. 教師のねらいと価値判断

本研究の前半にあたる、単元「東日本大震災からの復興」における分析では、学習者が「単元を貫く本質的な問い」に対して判断をおこなう OPP シートの「学習前」欄、「学習後」欄を分析対象とした。KHCoder の「共起ネットワーク」や「抽出語リスト」、「対応分析」等のコマンドを活用しながら特徴語を抽出し、「KWIC コンコーダンス」コマンドを用いながら分析することで、「子どもの価値判断」の変容を明確に可視化することができた。

本研究の後半にあたる第3章は、「子どもの価値判断」と「教師のねらい」とのつながりを可視化することを目的としている。そのため、授業における学習者の認知を伴った判断をより詳しく析出するために参与観察を実施した。以下の3段階で調査と分析をおこなった。第一に、観察の対象となる教師への聞き取りである。「教師のねらい」を析出するために授業において重視していることや社会科観について聞き取りをおこなった。第二に、参与観察である。観察をおこなうにあたって「教師の発問」から「教師のねらい」を析出するために、渡部、谷田部(2014)が開発した「マクロ的側面の分析視点と評価基準」の分析視点を採用した。第三に、OPPA と KHCoder を併用した授業分析である。発展課題実習における分析では、単元「東日本大震災からの復興」を分析した際の手順に加えて、学習者が記述した「学習履歴」欄についても分析もおこなった。フィールドやデータの分析にあたっては、学習者の行動変容を見取ることができる箇所注目した。

4. 本研究の成果と課題

本研究の成果、課題を以下にまとめる。

第一に、本研究の成果は、OPPA と KHCoder を併用した授業分析によって学習者の価値判断の変容を可視化できること、学習者がどの授業において教師のねらいに関する知識を獲得したのか可視化することができることを示したことである。本研究が、令和3年答申が重要視している ICT を用いた学習履歴(スタディ・ログ)の蓄積・分析・利活用に資する研究であること、教育分野における KHCoder の活用について詳しく記述している研究であることの二点は、本研究の意義であると言っていいだろう。

第二に、本研究の課題は、「手書き」を OPP シートの自由記述の方法として採用したことで、KHCoder に読み込む元データの入力に、膨大な時間をかけることになったことである。この課題を克服するためには、OPP シート自体を ICT 化してしまうことが考えられよう。この点については、今後現場で実践することを通して改善していきたい。